

「第21回日本臨床環境医学会学術集会」

(臨床環境21:115~116, 2012)

学術集会を終えて

— 南魚沼学術集会の終了にあたり —

第21回学術集会会長 鈴木 達夫

北里大学保健衛生専門学院

平成24年6月1日(金)～2日(土)の2日間、新潟県南魚沼市・市民会館で、盛大に開催することが出来ました。

第21回日本臨床環境医学会学術集会を開催するにあたっては、平成22年の総会で、相澤好治学会理事長の後を引き継いで第19回学術集会会長であった坂部貢大会長(東海大学医学部基礎医学系教授)が理事長に選出されたのと同時に、次々回学術集会長に、当時、北里大学保健衛生専門学院長であった新潟キャンパスの小生の所で開催することも承認された。

総会前日に相澤好治理事長から、学院を地元でアピールすることにもなり、大会長を引き受けないかという、温かいお言葉をいただき、ぜひ、引き受けることにしました。

当時、2期目の学院長として、学院の運営、発展に、頭をなやましていた時期でもあった。新潟県南魚沼市にある当学院は、上越新幹線の浦佐駅から4km、名峰八海山の麓に広がる自然豊かな環境である。学生は915名在籍しているが、その内、700名はアパート生活、アルバイトする場所もなく、勉学・クラブ活動ぐらいで、学問的外部刺激も少なく、学会参加の機会も少ないことから、学生の将来のためにも参加させ、最先端の学問に触れる良い機会となった。

また南魚沼・魚沼地域は、超高齢化・少子化の問題、福島県原発災害地からも直線的には近く、柿崎原発からも山一つ隣の日本一の米どころ、農産物有数の産地でもある。放射能の問題をはじめ、平成27年には、南魚沼市に機関病院が出来る

ことから、地域の将来に向けた医療のあるべき姿への関心も高い。この様な状況で学院の将来の役割も重要であり、今回の学術集会に、これらに関連した、シンポジウム、特別講演者を企画し、南魚沼市民の方々にも役に立ってもらえればと考え、本学会の学術集会開催を引き受けさせていただくことにした。ところが……

簡単にお引き受けして、学院に帰ってから学会をこの地元で引き受けるには、多くの課題があることに気付かされた。

大変なことを引き受けてしまったものであるということに気がついた。

学院構内は広く、階段教室・体育館・新しい500名入れる食堂・教室は多くあるが、土曜日も学生が授業はしている。学院の周辺には、ビジネスホテルが一軒、スキー客用の民宿しかない。学院は創立30年だが、学会開催の経験がない。研究室単位ではないのでスタッフもいない。教職員も日常、医療系のため、平日は、地域の医療機関に学生課外実習で出かけており学院にはいない。事務も学生募集・就職訪問・日常業務に、ぎりぎりの人数で学生業務に専念している。学会担当業務をする余裕はない。いくら学院長命令といえども無理である。管理運営会議で、再々協議し、担当として、地域渉外担当に情熱を燃やし、学院創設から在任している木村明先生を中心に、各学科長・副学院長の先生・事務長が学院の学会運営委員として協力してもらうことになった。しかし、当学会の内容・準備については無理があり、学会当日までの地元広報と会場での運営担当を学院関

係者をお願いした。

学会開催準備のための事務局は、悩んだ末、古巣の白金にある北里研究所病院の研究部バイオメディカルラボ・竹内修博士に学会事務局の経験もあったのでお願いした。病院長の山田好則先生、学校法人北里研究所常任理事土本寛二先生をお願いし、事務局を白金に、更に学会運営委員にもなっていただくことを承諾していただき、事務局を開設し、準備発進することが出来た。

しかし、遠く離れた、南魚沼で学会を開催する、しかも学院で、6月1日(金)・2日(土)の平日開催することは困難であることから、南魚沼市六日町で開催することにしたが、どこで出来るか? 白金との連絡はうまく行くのか? 交通の便は? 忙しい学会員の先生方、お願いする特別講演の先生・シンポジストの先生方に来てもらえるのか等々・南魚沼市の方々に協力してもらえるのか等々、心配することばかりが渦まいて、食欲もなくなり身の細る思いであった。(周りの関係者からは、ぜんぜん……と言われたが。)

気を取りなおして、南魚沼市で学会を開催する意義、そして、本来の「安心・安全な快適環境づくり」を目指す日本臨床環境医学会に最適な南魚沼の地域環境を会員の先生方に知ってもらうためにも、また、旭川市同様、この地にも「今だから大切にしよう、快適環境と健康づくり」を市民の方々にも学んでいただき、日本一の米どころ、自然豊かな、この地を日本中に発進できる学会を開催することの意義は重要と考えた。

さらに、未曾有の危機に陥っている東日本大震災と、それに伴う福島原発事故、長野北部地震、大雨による南魚沼広域災害等により、故郷が、地方が、産業が、環境が破壊された「今だからこそ」、「今この地で」開催する必要を強く感じた。

そこで、直接、南魚沼市井口一郎市長に、「地域のため、ぜひ、学会開催に全面的に協力をお願いしたい」旨申し入れた。井口一郎市長は、即座に、「学会を当地で開催して下さることは、大変、有意義なことであり、地元市民・地元にとっても、大切なことです。初めて当地で学会を開催す

ることとなり、市の活性化にも繋がり、全面的に市をあげて協力します。」とあたたかいお言葉とともに、すぐに小原元久副市長を呼び、具体的打ち合わせをするよう指示して下さった。その後、南魚沼市役所福祉保健部医療対策室北村祥博室長、上村忠雄医療対策係長、関陸氏、種村恒尚医療対策係長の方々が市の学会運営事務局となり、広報、ポスター作成や第20回日本臨床環境医学会学術集會に参加し、下見もしていただきました。また、地元中越にある全国NPO法人N・B・C・R中越支部の富所健太郎氏はじめ役員の方々、南魚沼市議樋口和人氏はじめ地元有力者の皆様はじめ、懇親会場となった龍言の宇津木女将・福田総支配人、多くの協力者の賛同により、すべての準備が半年かけて整えられ、学会の開催を大成功に導いていただけ、700名以上の参加者のもと南魚沼市民ホールを3日間提供していただき、学会を無事盛大に開催することが出来ました。

さらに、学会開催にあたっては、旧知の仲であります。日頃超御多忙な北野大明治大学工学部応用化学科教授の特別講演「水とは何かー水の安全性について」も手弁当で講演、懇親会にも最後までおつきあいいただき、市民の方々と親しく懇談していただき、大好評で思い出深い会となりました。

遠く北海道・九州からシンポジストとして来て下さった石垣靖子先生・安元公正先生はじめ各先生方はじめ座長の先生方、学会に参加されたすべての皆様に感謝するとともに、無事大成功に導いていただいた学会関係者、運営にあられたすべての方々にお礼申し上げます。

後日談として、「市長はじめ、多くの方々から、南魚沼の奇蹟の学会だ」と讚美の声が伝わってきたことを、学会の主催にたずさわって御苦労された皆様にお伝えするとともに、第21回日本臨床環境医学会学術集會を無事終了することが出来たことを一生の思い出として、北里大学保健衛生専門学院長を平成24年6月30日に退任したことを報告し、第21回日本臨床環境医学会学術集會大会長の任を解かせていただき筆を置きます。